

## 気(念力)、現代医学の新しい代案

李東原

韓国 里仁代替医学研究所長

### 1. はじめに

人体を組織と器官等の有機的結合として解き明かす構造的概念によって、解剖学と薬物投入を中心とした現代医学は、生体工学と義工学の支援を受けて、構造的形態を可視化させるX-ray、MRI、CT、PETなど、先端診断機器が開発され、使用されている。しかし人体の構造的異常が発現される前の、調和状態の不調和や機能的異常に対する診断は、今日の西洋医学的方法ではその限界性を見せている。成人病、慢性疾患、神経性疾患に対する診断及び治療はむしろ、漢薬と鍼術、気(念力)などを中心とした漢方医学的治療効果の優秀性が認定されているが、そのような方式が積極的に採り入れられなかったのが、今日の西洋医学と東洋医学の現実でもある。これは漢方医学的治療法の実体がまだ明白に糾明されない東洋医学の特殊性がその一次的原因になってもいる。しかし最近、現代医学において、東洋医学の臨床効果を多くの次元で科学的に研究する風土が多様に造成され、視空間気科学、生体気科学、潜在能力(超能力、透視、テレパシー、念力など)の分野で、非常に驚くべき成果が現われているようである。

東洋医学において病気の原因は宇宙を貫く気の流れを正しく受けることができなかつたことと、個人の内面に流れる気の通路がふさがったことから来る「気不足現象」と、「気の停滞」によるものと考えられてきた。したがって治療の第一条件は、気の円滑な運用及び流通と不足な気を満たしてくれる畜気である。鍼術、指圧などは、気を円滑に運用させる方法であり、特定の気が凝縮された食品を薬として使うとか、気の伝授者から直接、気を再充電されることにより不足な気を補うのである。そのような気の修練や気施術に対する驚くべき効果はずいぶん前から現われていた。それにもかかわらず、気の科学的証明がなされたのは最近のことであって、それもまだ微々たるものである。

### 2. 東洋医学の省察

筆者の考えでは、医学において一番重要な根本とは、生命を尊重するということであって、西洋医学と東洋医学の方法的区別はあまり重要ではない。疾病への接近方法には東西の区別があるとしても、人の身体と疾病には東西の区別はないであろう。したがって人が病気にかかったら、病気を治療することが、まずなされなければならないし、どんな方法で治療したのかは次善の問題であ

るであろう。重要なことは学説主の疾病治療ではなく患者のための治療である。

東洋文化を基盤として発展した東洋医学は、数千年の間体系化された理論と蓄積された臨床実験によって、自然と人体現象に対する高次元的な解釈、卓越した養生、保健衛生に対する機能と安定的な臨床医の治療効果を根拠にした西洋医学一辺倒である世界の医学界においても、相変わらず、東洋医学自体が持っている機能を遂行しながら存続している。これは東洋医学が自主的ながらも創造的能力を持っているという証であるといえよう。人体治療に対する根本に重きをおき、その本性を模索する時、初めて新しい創造的能力が現われるのである。

筆者は統一思想の真実をよく知ることができない状態であるが、統一思想の内容は多くの側面で東洋医学にたいして示唆する点が少なくないということを発見した。特に、統一思想は「心と身体」に対して、本質的に、現象的に区別しながら、その属性は「エネルギー的な心」であり「心的エネルギー」であるとして、性相と形状の授受関係であると解明している（『統一思想』、2001年、p. 40）。それは今回の筆者の発表主題である「気(念力)」と直接係わる命題であると思われる。

#### (1) 患者の安楽死とその家族の安定

筆者の発表主題である気(念力)の効果は、まだ科学的に検証すべき事ながらたくさんあるが、筆者が体得した現実的效果に対する事例のいくつかを先に紹介することにする。2004年12月28日付けの韓国の日刊紙に載った内容が筆者の目をひいた。それは日本尊厳死協会の専務理事である松根敦子のインタビュー記事である。ここで注目すべきことは「患者は楽に死ぬ権利があるということと、同時にその家族らが安定する権利があるということ」である。患者が平安な終末を迎えなければならないということは多くの人たちが当然のことと考えているが、その家族たちが患者によって経験する苦痛に対してはあまり注目しないようである。この点で日本尊厳死協会は非常に意味ある事をしていると思われた。日本尊厳死協会の専務理事が強調したように、患者が最後の道を安楽に行くことがどれだけ重要であり、一方有家族たちが患者の悪影響から保護を受けることがどれだけ重要であるかを考察していた。これと関連した経験の一つを紹介しようと思う。

2001年10月15日、50代後半のある男性が筆者を尋ねて来た。彼はお腹がひりひり痛み、消化不良によって、しょっちゅう苦しくなると言った。筆者は患者

に「3ヶ月間、本研究所の気(念力)を受ければきれいに治ることができる」と言った。その後、彼は軽い心で本研究所を出たが、患者のお供をした方が「患者の病名は何なのか」と電話で問うた。筆者はそれが胃癌であると言った。そのお方は「それでは、どうして患者のいる所でその事実を知らせてくれなかったか」と問うた。筆者は「その胃癌は比較的軽い状態なので、3ヶ月位の気(念力)療法によって簡単に治ることができるから、敢えてその事実を知らせて心的負担を与えたくなかった」と言った。結局、彼は筆者の勧告を無視して、病院で癌の診断を受けて、病院の要求どおり抗癌治療を受け始めた。その後しばらくその患者の消息を聞くことはできなかった。翌年7月、その胃癌の患者が家族を伴って本研究所に来た。患者の姿は一般人が見るも重病患者であることを分かる位に大変やせていたし、横で誰かが支えてあげなければ一步も歩くことができない位に衰弱していた。

その患者の婦人は「あの両班は一服の水も飲むことができないのです。飲めばすぐ戻ってしまうんですよ」と言った。筆者はその婦人に「その症状が現われてから今日できっと21日目です」と言った。するとその婦人は「先生、是非私の主人を生かしてください」言いながら、筆者にしがみついた。筆者はその患者が外に出ているようにしておいて、婦人に「これからあの方は3-4日位しか生きることはできません」と言った。その奥さんは「これから先生の気(念力)を受ければ、どうなりますか?」と問うた。筆者は「そうすれば、気を受けるうちに鎮痛剤を受けなくてもよいほどに痛みが緩かになるはずですが、それでもこれから30-40日を越すのは難しいでしょう」と答えた。その婦人は「それでも良いですから気を受けます」と言った。私の予測どおり、その患者は最後の40日余りの間、苦痛を感じなかっただけでなく、普通人のように、一日三食の食事をしながら、末期癌患者らしくないように安らかな状態で終わりまで暮すことができた。

葬礼が終わった後、その婦人が尋ねて来て感謝すると言った。その婦人はその後、ずっと感謝しています。婦人がほんとうに、とてもありがたく思ったことは、患者本人が苦痛をほとんど感じないで一生を終えたということと、家族たちをその患者の悪影響から保護してくれたということである。一般的に、末期癌患者は甚しい苦痛を経験するようになるので家族も、やむなくその苦痛を分かち合うしかない。いわゆる「患者家族の苦痛」が甚しいのである。もしその家族が患者以外に5人いたならば、その中でその患者と体質や性格の似ている家族は、患者が与えるストレスに最も敏感に影響を受ける。その潜在的影響力は彼の臓器に衝撃を与えて故障を起こし始める。その現象は比較的長年の期間

に現われるようになるので、いつかは亡くなった患者のような症状を経験するようになる可能性が非常に高い。先に言及した患者の場合、短い期間であったが、筆者の気(念力)によって苦痛を減らすようになったので、他の家族たちはストレスをより少なめに受けて、各自の生活に充実できたのである。言い替えば、筆者の気(念力)が日本協会が主に追求しているように、患者を楽にするだけでなく、患者の家族たちを保護する役割を充分に行ったという点でかなり注目に値するであろう。そのような事実によって、その婦人はいつも筆者に感謝の心を表すようになったのである。

## (2) 気(念力)の実体と実質的効能

### 1) 気(念力)の実体

それでは、この気(念力)とはいかなるものであり、疾病はいかにして生ずるのか、気にならざるをえないでしょう。それに先立って、筆者がいかにして疾病問題に関心を持ち、それを解決しようと努力するようになったかについて簡単に紹介しようと思う。筆者は由緒ある漢医師の家で生まれて成長した。筆者の祖父と父親は韓国慶南蔚山地域で代々、有名な漢医師として過ごした。特に、鍼術に関しては一家見があることが広く認められていた。一方、叔父と長兄も皆漢医師であったし、四寸の弟は米国で漢医大学教授に奉職していたが、数年前、韓国に帰国して今漢医師で開業している。

こんな家門の来歴徳分によって、筆者は幼い頃から病氣と治療に関する直接間接的に経験できる機会がたくさんあった。ある時には、患者が死んで行くのも見た。筆者が初等学校3年生だった時、父親が漢医学の勉強にさらに精進するために、お寺に入ったことがあった。尋ねて来る患者らを追い返すことができなくて、初等学生である筆者が針施術を行ったりした。そのような環境が筆者を仁術に従事できるようにする運命的道案内だったのかも分からない。

その頃から病氣とその治療に関する特別な苦悶が多かった。そんな苦悶は幼い少年を常に深い想念にふけるようにさせたし、夜の眠りをさまたげることも多く、学校の授業時間でも、自分の精神世界に没頭して、他のことを考えているとあって、先生から叱られる事が一二度ではなかった。

筆者が30歳になってから悟った事実は、人体の「気の流れ」が重要であるということであったのだ。人には5臓6腑があって、それが全人体を管理し、血液と気が全身に流れるようにする非常に重要な役割をしているという事実を悟るようになった。人体の5臓6腑は、機械の中心に該当し、河川の貯水池に該

当しているという、とても重要な事実を認識するようになった。四肢は勿論、髪の毛、爪と足指の爪に至るまで、すべての器官で5臓6腑と連結していないものは一つもない。したがって四肢に問題(病)が生じた場合、四肢自体を治療しようとするのは何の意味があるだろうか？ 交通事故や絶断事故のような外科的な応急治療を除けば、どんな疾病でも、その原因を提供している5臓6腑を度外視して、その患部(言わば手、足、足など)にだけ注目することは無意味であるということが、30歳を過ぎた時の筆者の結論であったし、その後、筆者が多様な医療経験を通じて確信した事実である。

まず気(念力)を理解するために、いくつかの概念を紹介しよう。陰陽の概念から考察しよう。漢医学における陰陽、五行などの用語は非現代的であり、漢医らの説明は現代人が容易に理解できるようにする努力が足りないから、漢医学自体、何の学術的価値もないように見る人たちが多い。しかし説明方法がよくないとか、一般人たちがそれを理解できないからと言って、その原理と事実まで否認することはできない。

陰陽説は中国哲学がその根幹になっており、宇宙自然の理法を陰陽説で説明している。陰陽の量的配合の差異によって、五行から物質が化生し、陰陽両気の消長によって四時が還易する。太極が両儀(天地陰陽)を生じ、両儀が四象を生じ、四象が八卦を生じ、八卦が64卦と化する。陰陽配合量の差別相は無限大に広がって行って、そこに宇宙万物が生成するのである。五行説は多元論であり、陰陽説は二元論であり、太極説は一元論である。多元論は二元論に統制され、二元論は一元論に帰一にするとところに東洋学問の面目がある。

陰陽説を哲学的に論評ないし解説するのに役立つ、いくつかの内容があるが、それは早い話が、陽は動を意味し、陰は静を意味するのである。陽は積極的であり、陰は消極的である。活動を盛んにすれば多くの熱量を消耗して体温が増し、活動を少なくすれば体温が下がる。それで熱は陽であり、寒は陰である。

陰陽がよく調和すればこそ、私たちは常軌的な生理状態の健康体を維持でき、陰陽が不調和で生理的調節の均衡が壊れれば、病的現象が生ずるのであり、常軌的生理状態から離れたことが病気なのである。過ぎたことも病気であり、不足したことも病気である。体温が39度や40度に上がることも病気であり、34度や35度に下がることも病気である。脈搏が90回や100回と多くなったことも病気であり、50回や40回と少なくなったことも病気である。前者は陽の活動が強く、後者は陰が強と陽が弱い時の現象である。陰陽の調節機能の均衡が壊れた時、

それがすなわち病気になることであり、人間の生活に支障をきたすようになるのである。

ここで64卦はすなわち8卦であり、8卦は4象である。4象はすなわち陰陽であり、陰陽は太極であり、これが正に気(念力)と言える。気(念力)はすなわち太極である。

気は5臓6腑を管理する力である。その力には木、火、土、金、水があつて、これらが5種類の力になって、5臓6腑を調節しているのである。この5種類の力が5臓から生成して身体の全身を管理しているが、人の生活において、過労、栄養、環境などが原因で気(念力)の損傷をこうむるのがすなわち病気である。だから気をよく維持した時、自身はもちろん他人も治すことができる。気も濁った気と清い気があるが、清い気で他人のために行えば、良いことができ、濁った気で他人のために行えば、悪い事が起きる。

筆者の整頓した気(念力)によって、他人の崩れた気を調節することが、すなわち他人の病気を治療することである。これを筆者の経験に基づいて仔細に説明できるが、時間的制約があるから、一二の実例のみを示すことにする。

## 2) 気(念力)の実質的効能

4年前、28才のある女性が白血病で本研究所を訪問した。その女性は約2年余り、筆者から気(念力)を受けることで完治した。この間、本研究所に電話が来た。その患者は「現在は妊娠中ですが、右側大腿骨関節が奪骨になったので病院を捜して矯正を受けたが、また奪骨が続くので産婦人科にまた行った」と言った。担当医師は「経過をもう少し見守ろう」と言うので、本研究所に電話をしたのであった。それで筆者は、何度も電話をしなさいと言ったが(電話を通じて気を送った)、ついに、関節に力が生じて、それ以上奪骨にならなかった。その女性の主人は内科の医師であった。主人は私に「その症状の原因は何ですか」と問うた。筆者は「肝が虚弱なので、肝が主管する系統が弱くなって、大腿骨が抜けたのだ」と言った。その女性は筆者から何度も気(念力)を受けたが、それからは大腿骨が全く抜けなかった。しかし筆者は完全な回復のためには、しばらく気をもっと受けなさいと言った。

次は60歳の女性で甲状腺癌にかかった場合である。筆者は下腹の卵巢がある所を指摘しながら卵巢管の異常がその原因であると診断した。その後、卵巢がある方に気を送った。約3ヶ月位の気を送った後、また病院に行つて確認した結

果、首の右側前部にあった1.2cmの悪性腫瘍と首の左側前部にあった0.2cmの良性腫瘍に変化があった。左側の悪性腫瘍は良性腫瘍に変化した。一方、比重を置かなかつた(気を集中的に送らなかつた)0.2cm良性腫瘍は悪性に変化していたから、現在も気を送り続けている。

最後に、アメリカに留学をしている男子高校生に関する事例を紹介しよう。その学生の父親が筆者の所に来て「息子の肝がとても悪くて肝移植を受けなければならないのに、病院では体力があまり落ちて、今は肝移植ができないので、まず体力を回復することができないだろうか」と言った。その学生の場合、肝が汚い成分を処理することができないことから基因した症状であつて、肝の状態がとても悪くて、それでは病院で薬物処方、肝移植などの治療が難しい状態だつた。筆者は「脾臓が良くないからだ」と診断しながら、「肝に集中的に気(念力)を送れば、肝の機能はすぐ回復することができるが、すぐ再発するはずだ」と付け加えた。そして「脾臓を回復させて肝を治すようにすれば、再発しないだろう」と言った。その父親は米国に帰り、学生が韓国に来ることができないので、1週間、電話を通じて、その学生にずっと気を送つた。1週間後、父親から、(電話で)「担当医師によれば肝が回復した」と言うのだった。一カ月経つた後、筆者が東南アジアを巡回する用事ができたので、韓国を出国するとき、筆者は電話ローミングを申請した(すでに筆者から電話で気を受ける方たちが多かつたので、電話ローミングは非常に重要であつた)。ところで電話会社の事情で36時間の間、電話を受けないことになつた。36時間後、その父親と通話できたが、その学生の脾臓が13cm腫れたというのであつた。父母は非常に切迫した心情で筆者に電話をした。その日は5分で遠いと言って電話を終えたが、そういう切迫した状況はその翌日まで続いた。そして病院で確認した結果、気(念力)を行つた2日目に、その13cmの腫れがすべて消えたというのであつた。現在、気のための電話は10ヶ月目になつている。2ヶ月前、検診した結果、これからは二〜三ヶ月に一度来て検診を受ければ良いというのだった。勿論、この気(念力)を受ける間、病院の検診以外に、その病院で行う他のどんな治療も禁止するようにした。その外にも、気(念力)の効能を立証する無数事例があるがこれで終えようと思う。

### 3. 東洋医学の実際

#### (1) 東洋医学の形成過程

今、見てきた主題と関連しながら、東洋医学の実際に対して述べよう。人類が生まれてから発生した医学は、人類がある目的を持って実践して来た活動である。何千年の間、医学はいつも人類の一番崇高な理想にかなうように努めて来

た。東洋医学が歴史的に悠久な医学として発展したのは、東洋医学が選択した独特の研究方法によることが分かる。

医学では、養生を通じて疾病を予防することができるが、養生は人体が持っている主体的に開放された自体組織システムの組織的な活動を促進させることで、人体の組織能力を自ら回復するようにせしめるからである。また有害なものを利あるものに変化させて、養生に役に立つように、毒物を治療薬物に変化させて、疾病の治療に役に立つようにしているのであり、これが医学の基本的な機能なのである。言い替えば、医学は「自然環境と人間との関連性」に対する研究であって、健康と疾病の変化を把握して、医学研究において新しい学説を発生させるのである。

春秋戦国時代の陰陽五行学説と精気学説は古代中国で形成されたのであるが、古代医学者たちはこのような学説を利用して、散在して来た医療経験を収集し、当時の自然科学成果と結合させて、完成させ、感性的認識から理性的認識の段階に発展させながら、比較的なだらかな理論体系を形成した。自然科学の影響は東洋医学の堅実な基礎になった。古代医学家が主張した「6期(風、寒、暑、湿、燥、火)が病気を起こす」という学説は、その頃の医学者たちが自然界の異常な気候変化が人体の健康に対して無視することができない影響を与えたことを説明している。

## (2) 黄帝内径

経典的な医学文献である黄帝内径は靈枢と素問という「二つ部門に分けられて、陰陽五行説を理論方法で、整体観念を指導思想にして、人体内部の活動規律と、人体の外部、自然環境との統一性を認識するようにした。人体の解剖、生理、病理、経絡及び疾病の診断、治療、予防などの問題に対して、比較的、全面的に体系的に説明した。これは医学理論を説明すると同時に、当時の哲学領域に存在する一連の重大な問題、すなわち、陰陽五行、精気、天、人、形神関係などに対しても討論と探求を行った。それで、黄帝内径は医学内容を中心にして自然科学と哲学理論を有機的に結合した結果として、東洋医学の発展を推進しただけでなく、理論基礎の源泉になった。すなわち、形態方面において、人体の骨格、血脈及び内臓に対する妙方、生理方面で整体的である連結は、今も重要な研究価値を持っている。

## (3) 精-気-神、陰陽

東洋医学は古代唯物論と弁証法思想の指導の下、人類生命の起源、形体と精神



の関係及び疾病の原因など、一連の重要な問題を唯物論的な観点から説明し、証明した。世界は物質によって形成されたのであり、万物の生成は天地陰陽の気が相互作用した結果だと見ている。すなわち、人体は親の精気が結合されて、母を基本に、父の保護を受ける関係によって形成されるのであり、胚から分化発展して、形体と精神が具備した人体に形成されるのである。そういうわけで東洋医学では、生命は物質であり、人体の生命形相は物質の運動であり、人体の臓器組織の機能活動が総合的に形成されることを認めた。

形と神（精神）の関係は生物と情神の関係である。東洋医学は古代の唯物主義の精華を吸収して、臨床実験と結合して、物質と精神の関係を正確に分析した。物質である精気は生命の根本で第一静的であり、精神は物質から形成されたので第二静的である。すなわち、物質である形態があればこそ、生命とそれによって形成される精神活動及び具体的な生理機能があることを強調した。同時に、人の形体は必ず自然界の決まった物質を摂取しなければならないし、これが気血に変化されることによって人は生存することができ、この過程はまた、必ず精神の機能活動が正常に発揮されることによってなされることを指摘した。このような形は神が入っている器であり、神は形の主観であって、相互依存しながら分けることができない関係にあるので、「神と形は結合である」ということになる。すなわち、形態が存在すれば、精神が存在し、形態が消失すれば精神も消滅し、精神がなければ形態は生きて行くことができず、形態がなければ精神の頼る所が消えるのであり、両者の関係は相互に寄り掛かって助ける関係として分けることができないことが分かる。

東洋医学理論において、形と神が統一されているという唯物観は養生と防病、漣年益寿及び診断と治療などの方面で重要な基本になっている。東洋医学では、陰陽は一組の対立と統一の矛盾であり、両者間の盛衰変化は、自然界の運動発展の根本規律であり、高度に発展しながら、陰陽である二つの気が相互作用した結果であると見ている。生命の本質は人体内部の陰陽の矛盾または対立、統一及び人体と周囲の環境との統一である。人の生命活動の過程は、すなわち人体の陰陽の対立、双方が絶え間ない矛盾運動の中で統一を成す過程である。

東洋医学は人が自然界の一構成部分であり、自然界と密接な関係があるということを強調し、人体の各組織器官は皆一つの統一体の中に位置づけられており、生理上、病理上、皆相互に結ばれていて、相互に影響されるという整体観念である弁証観点が確立されるのである。

その外に東洋医学では運動は物質の性質であって、すべての自然界と完全な一体をなした、すべての物体として、皆永遠に運動するものだと見ている。その運動の形状が昇、降、出、入であって、人体の生命過程は「生、長、壯、老、死」の数段階として見ることができる。先に紹介した矛盾観点、整体観点、運動観点は東洋医学、弁証法思想の三大表現であり、この三大観点は生理、病理、診断及び治療など、さまざまな方面で用いられている。

#### 1) 生理方面

生理方面において、弁証観は重要であり、人体が臓腑を中心にしながら経絡を連続関係にして、内外環境が相対的に統一された整体観、臓器の間で相互に依存し、制約しているという対立統一観、気血、体液など生命活動に必要な物質と臓腑の生理機能精神活動と生理活動の間の弁証統一観などとして表現される。

#### 2) 病理方面

邪気が人体を襲う時、人体が正常でなければ病理変化が生ずるということで、内因を重視すると同時に外因を否定しない病因学観点、「精気が体内に発頭すれば邪気が襲うことはできない」という、内面を重視する病理学観点、五臓が互いに繋がれているので病症は転変し、「順に移動する」という病機学観点などは、弁証法思想の東洋医学病理方面における具体的な表現である。

#### 3) 診断方面

東洋医学では、疾病は人体各臓腑の間の内部環境と人体の外界環境の間に協助、均衡が破壊されることによって発生すると考えられている。そのために疾病を診断する時、疾病を孤立的に見ずに疾病の形成、発展変化と人体の全身の状態及び生活の自然環境と社会環境と連結して、一つの有機的な整体として考察しなければならない。すなわち、天文、地理、社会、四診などを総括的に分析して、現象を通じて本質を把握して正確に診断しなければならない。

#### 4) 予防と治療方面

治療において、正気を助けて邪気を取り除いて、陰陽を調節する原則は、対立統一観念の具体的な応用である。人によって、地域によって、季節によって、適切に治療しなければならないという原則、全体と局所を同時に重視するのである。外的治療と内的治療を結合する原則などは皆整体観念を利用した積極的な表現である。

東洋医学は整体観念と弁証論の二つ重要な特徴を持っている。整体観念では、

人体の各部分は組織上では分離させることはできないし、機能上では、相互協調、相互利用し、病理上では、相互影響し相互制約する一つの有機的な整体として見ているだけではなく、人と自然界は相互に繋がれ密接に関わっていると見ている。このような人体自体の統一性と自然界との統一性は整体観念の基本内容であり、東洋医学において疾病を認識し、治療方法を確立する理論的根拠である。

弁証論治は弁証と論治の二つの部分を含んでいる。弁証とは、四診を通じて得られた材料、症状と体徴を総合的に分析して、疾病の原因、性質と部位を正確に判断して、証候の類型を定める過程を言うのであり、論治は弁証の結果を根拠として、整体観念の指導の下で対応する治療法則を定めることをいう。弁証は治療を決める前提、根拠であり、論治は疾病を解決する手段と方法として、両者は分離することができない。

#### 4. 終わりに

東洋医学の特殊な研究方法の持続的な維持と開発によって、徐々に、一步一步、これからも発展して行くと考えられる。筆者の発表主題、特に「東洋医学の実際」は統一思想の見解、特に世界観、物質観など見解を異にする部分が少なくないことが分かった。統一思想の基本的骨格は筆者の見解に新しい地平を開いてくれた。そのような契機を迎えて、これから統一思想をさらに熱心に研究しようと思う。

最後に、筆者は韓国は勿論、日本でも里仁代替医学すなわち。気(念力)の驚異的な医学的成果が共有になることが期待される。日本に一月に一二回、時には2ヶ月に一回位往来している。小さな動きであるが、ここ日本でも筆者の意に同参しようとする方たちが少しずつ生まれているということは、筆者としては非常に鼓舞的なことである。現在から見れば、ちょっと遠い目標だと思われるかも知れないが、筆者は韓国と日本で20-30万名の代替医学会員を確保して、南北韓統一に寄与できる企画を構想している。教授の皆様の多くの協助をお願いします。